

モーツアルトの「ピアノソナタ17番」。ホールの雰囲気、事前の練習で、ある程度把握していたことだろう。でも、本番は別、人いきれオン、微妙な変化。ピアニストは、聴衆を引き付けなければならぬ、豊富などたん場経験、落ち着いて自分のペースに引き込まんとする。馴染む迄の僅かな心の乱れ、演奏に反映、少しいびつな玉の転がり。堅実な対応、作曲家の穏やかな語り掛け、オリジナルなイメージ、飾らない真実の言葉。2楽章、念を入れてのコンセントレーション。研ぎ澄まされた音、寸分の狂いなし、ピッタリ・ジャスト、少しの濁りも許さね潔癖性、演奏家のコダワリ。緊張感を楽しむ余裕、スッキリ鮮やか存在、シッカリとした立体感。

シューベルトの「ピアノソナタ13番」。走り書きの楽譜、メロディーの宝庫、深刻ならざる屈託なさもこの作曲家の魅力。このピアニストの場合真摯に応接、地に根ざした演奏。「夢見る花子さん」的に目を細めるコトなく、確り見据えて覚醒。ノーテンキなヒバリの楽天的なサエズリを期待してはイケナイ、お喋り九官鳥の楽しげなヘリウム・ボイスもない、衷心からのメロディー・メッセージが沁み渡る。夢心地の春のホノボノっていうより、シットリとした秋の匂い、クッキリとしたナイーブさ。若々しい乙女の憧れフェーズは決別、キレイな音楽を心込めて創造、気品ある上質目指して。

シューマンの「幻想曲」。ダイナミックな低音の響き、心地よい揺さぶり、ピアニストの思い描く幻想の世界。森永製菓のエンゼルがいざなう、ほのぼのふわふわ、ファンタスティック・ワールドでなし。もっと濃厚で濃密なアトモスフェア、谷崎(潤一郎さん)文学シーンかな(ほとんど読んだことはないが)。これまで、音楽を通して体験したことの総決算、臆することなく理解力、感性、テクニックを総動員、でも、あくまでも今の時点での通過点。この曲に対する熱き思いをストレート吐露、コテコテ飾ることナシ、逆にエッセンスのみを抽出することもなし。背伸びしてのフクロウ威嚇モードてなことはない、素直に自分のモノサシに従うだけ。盛り込む迫力、気恥しい若い頃の思い出もチョッピリ、奇矯でないから、スンナリと心にフィット。前半の2曲は自分サイドで育んだもの、シューマンの大曲と向き合うピアニスト、全面チャレンジ相対峙。聴き手は絶対の信頼を持って進化の過程を聴き入る。(2008.6.26)

---

モーツアルト：ピアノソナタ 17番 変ロ長調 K.570

シューベルト：ピアノソナタ13番 イ長調 Op.120, D.664

シューマン：幻想曲 ハ長調 Op.17

(アンコール)

ランゲ：花の歌

モーツアルト：トルコ行進曲(ピアノソナタ 11番 イ長調 K.331 第3楽章)

ギロック：「叙情小曲集」から「はちどり」嬰ハ短調

---

---

チャイコフスキー/ブレトニョフ：組曲「くるみ割り人形」から「行進曲」

ショパン：ノックターン 20番 嬰ハ短調 Op.poth

---